

私が花と過ごした日々と、これから…

名城大学農学部附属農場

鈴木 忍

私の「花への興味」の原点は千葉大学園芸学部園芸別科にあります。学生当時は担当教員であり、人生の船頭的存在の渡辺 均 先生のもと、多くの仲間に恵まれ楽しく実りのある学生生活を過ごしました。私自身、もともと植物を栽培することが好きでしたので、農場実習や講義などで今まで触れたことのない多種多様な植物をさまざまな方法で栽培し、それらについて学ぶことに喜びを感じていた事を思い出します。知識を得ることに充実した日々を過ごし、私自身の研究では“*Sparaxis tricolor*”という南アフリカ原産のアヤメ科の球根植物に出会うことが出来ました。苦楽を共にした同級生とは今でも親交があり、今も昔と同じように会えば打ち解けあえる仲が、とても居心地が良いです。

平成15年に別科を修了後、千葉県白井市にある有限会社高橋植物園へ入社しました。当時は宿根草（カタナンケ・クナウティア等）を主軸に一年草（パンジー・ビオラ・ペチュニア等）や球根類（オリエンタル系ユリ・LAユリ等）のポット苗・鉢物生産に従事させて頂きました。高橋植物園での経験がこの後の人生に大きく影響を与えており、当時の下積みがなければ今の自分は確立されていなかったと思います。

その後、平成18年に退職を機に国際農業者交流協会のアメリカー研修（アメリカコンビネーションコース18ヶ月間）に参加しました。海外の生産現場に直に触れることができるチャンスでしたので、大きな期待と希望を胸に自分自身の岐路と認識して研修に臨みました。国内での研修・講習を修了し、平成19年3月に渡米しました。その後、現地での語学研修を経てカリフォルニア州にある Coast Nurseries Inc. という会社の Somis農場へ研修生として配属されました（現在、研修先の会社は残念ながら廃業しております）。



配属農場 BOSS と同僚 左側が私

ここでは、花壇苗を主軸に鉢物や野菜苗などを販売店（ガーデンセンター）へ卸していました。アメリカでは日本の様な花市場がなく、この会社では、直接販売店へ品物を運び陳列を行い、店頭で販売された分だけの収益を得る仕組み（Pay by Scan）を取り入れていました。

施設ではムービングベンチ方式を導入しており、植物の生育ステージに合わせた環境へ移動しながらの管理を行っておりました。また、農場に設置されている蛇口は赤色・黄色・青色・白色・黒色に色別され、それらは濃度の違う培養液や真水が施与できるようになっていました。灌水毎に管理責任者への蛇口を使用するか指示を仰ぎ作業を行いました。各温室には温度・湿度センサーが設置され、灌用水の培養液を混合する施設にはpHセンサー・各種濃度センサーが設置されていました。

これらのデータは管理事務本部に設置されている管理用パソコンへ常時送信されており、そのデータを基に温度上昇時は温室の天側窓閉開や培養液の異常値の有無を監視していました。また、これらに異常が発生した場合は、自動的に研修生が持たされている携帯電話へ発信される仕組みでした。24時間いつでも異常を知らせてくれる素晴らしいシステムでしたので、ある時は真冬の深夜に低温温度異常を知らせるアラームが

なり、ある時は「サンタアナ風」と言われる地域特有の乾いた熱風による温度上昇で砂埃が嵐の様に舞う中、異常個所を点検したりしました。当然、私が直接異常を直すことは、知識と経験が浅い研修生には無謀ですので、上司に連絡し問題があることを知らせて指示を仰ぎ、それらに対処していきました。ただ、これらすべてが英語で行わなければならないので、当初は大変苦労しました。

農場で働くワーカーの多くはメキシコ人で、日中仕事をしている間はスペイン語を言語として使用しました。

彼らは陽気で時には歌い時には踊り、仕事中でも陽気さが絶えず楽しい日々を過ごさせてもらえました。もちろん文化の違いやちょっとした意地悪で言い合いになる事もありましたが、時々現れる紳士的な姿には感心しました。

そして、約1年の農場での研修を修了後、University of California Davis での専門学習が始まり、アメリカ農業や文化についての講義や産地見学で新たな知見を得て、平成20年12月に帰国しました。



ワーカー達と…

帰国した時点では次へのステップについて漠然としておりましたが、縁があり千葉県柏市にある千葉大学環境健康フィールド科学センター 都市環境園芸農場（以下柏の葉農場）“花卉・苗生産部：高度化セル成型苗生産利用システム”の技術職員として勤務させて頂くことになりました。実はアメリカ研修に参加する以前の数カ月間を研修という形でお世話になりました。この部門を率いるのは私の船頭である渡辺 均 先生です。私が従事した主な職務は“栽培管理（苗物・鉢物）・実習指導等”でした。

栽培管理面では、当時、群馬県沼田市にある森林環境園芸農場（以下沼田農場）で栽培されていたシクラ

メンの生産終了に伴い、柏の葉農場へ栽培移転という形で進んでいました。しかし、今まで沼田農場で行われていた生産技術を移転する訳ではなく、新たに柏の葉農場としての技術を確立する必要がありました。

そこで、千葉大学の先輩であり、アメリカ研修の先輩でもある群馬県館林市のシクラメン生産者である誠養園の野本 寿久さんに栽培技術指導をお願いし、柏の葉農場シクラメンの立ち上げに御協力頂きました。



シクラメン祭

（左から私・渡辺先生・石井技官・長嶋技官）

（シクラメンはサクラソウ科の多年草で日本では11月～12月までが出荷期です。特に御歳暮など贈答品として利用されることが多く、国内での鉢物類の出荷量としても最も多く流通されている品目です。）

シクラメンの栽培は播種から出荷まで一年がかりで行います。特に暑さに弱いシクラメンにとって夏場の高温期が正念場でした。なるべく涼しく保つために葉水を与え、温室内の温度上昇を抑えるためにミストを散布する工夫などをしました。しかし、その間にも色々な問題が発生し、夏場に病気で株を枯らすなど先が見えず苦戦する日々もありました。

シクラメンの栽培は実習にも取り入れられ、播種・鉢上げ・鉢増し・葉組み等、季節ごとに重要な栽培ポイントがあり、それらを実演と実践を交えながら細かく指導していきました。私も当時はシクラメン栽培ビギナーとして、野本先生の指導を思い出しながら指導を行いました。

苗物生産ではイベント用の花壇苗の生産供給も行いました。平成22年の千葉国体でのおもてなしプランター用の花壇苗や平面花壇のデザインから設置まで協力させて頂きました。その他にも、印西市の NPO 法人木下夢探訪さんの「ビック雛壇」ではビオラ。有限責任事業組合お花がかりさんへは、六本木ヒルズの植栽や

東京ドームのイベント用に沢山の花壇苗を提供させて頂きました。どれも納期や出荷規格が指定されているために大変苦労しましたが、これらは全て実習教育に利用されており、学生が生産する緊張感を持ちながら行き、それを指導する立場で行えたことは良い経験だったと思います。

何の業界でも同じだと思いますが、学生実習に技術指導がある場合は、基礎的部分は勿論ですが、現在進行形で動作している応用を取り入れた技術に、なるべく近づける必要があると思います。当然、施設の状態も新しい環境に整えられるように努力し、新鮮で刺激のあるものを沢山見せ、なるべく包み隠さず教えるのが大切だと感じました。また、今迄の自分が歩んできた経験の中で得た情報や細かな技術・体験談等を盛り込むことで、興味や関心の高まる度合いが違うことも実習指導の中で学びました。

そして、またまた色々な縁があり、現在は名城大学農学部附属農場の技能員として勤務しております。初めに名城大学について紹介させて頂きます。愛知県名古屋市長白区に本部を置く私立総合大学です。私が勤務している農学部附属農場は本部から北に車で一時間弱にある春日井市に位置しています。附属農場は約13万㎡の敷地面積に畜産・作物・造園・果樹・蔬菜・花卉の6部門が設置されており、多種多様に富んだ動植物を栽培飼育しております。人員構成は専任教員4名・教務技師1名・事務職員2名・技能員7名・非常勤職員9名の計23名が在籍しています。私は花卉部門に属して、技能員の私と専属の教員1名と非常勤職員1名の計3名で担当しております。

花卉部門の主な施設はガラス温室6棟・パイプハウス2棟・露地圃場からなります。内訳は切花ガラス温室2棟(320㎡)・切花ハウス1棟(50㎡)・苗物鉢物ガラス温室3棟(350㎡)・苗物鉢物ハウス1棟(130㎡)・ミストガラス温室(30㎡)・露地切花圃場(1,500㎡)・苗物鉢物露地圃場(210㎡)を有しています。

切花の主要品目は愛知県の代表的品目であるキクで電照加温を利用した周年栽培を行っており、昔は大学オリジナル品種も育成していました。その他にストックやキンギョソウ・トルコギキョウ・ダリア等を栽培しています。苗物・鉢物は主要な一・二年草花壇苗(パンジー・ビオラ・ペチュニア・ガザニア等)と宿根草(ロベリア・フヨウ・ガイラルディア等)を栽培しています。鉢物はガーベラ・カーネーション・シクラメン等を栽培しています。これらのほとんどは学生実習で使用する教材や卒業研究材料という面がありま

すが、出荷期には学内売店で販売される商品でもあります。

私が附属農場に勤務して3年目になりますが、施設の老朽化が問題として挙げられます。現在も徐々に改修を進めており、花卉の栽培に適した施設と機能的な教育研究を行える場としての改善を行っております。栽培品目に関しても常に新しい品目へ挑戦しています。

また、標本栽培と教育研究栽培の両面を充実させるために主要施設の栽培区画整理などを行い、より対外的に観賞できる圃場を目指しています。標本栽培は現在大学内で進められている“名城大学農学部附属農場遺伝資源データベース”の構築にも関連されるもので、附属農場内にある動植物はラベルや看板等に設置されているQRコードで、学内データベースにアクセスでき、誰でも自由に閲覧することが可能です。



名城大学附属農場 遺伝資源データベース
アクセスQRコード

それらの有効活用を目的とし、遺伝資源として有用な植物を収集し発信していこうと考えております。

また、収集した植物を教育研究材料として更に活用できないか検証を行い、幅広く利用できるようにしております。また、独自の取り組みとしては、大学独自のプライベート品種を育成しようと考えております。これらの品種は地域社会への貢献を目的とし、大学キャンパス内の植栽やイベント・学内販売などに利用することから始めようと思います。そして、更に品目数を増やし実習教育に取り入れられる様な環境を整え、新しい教育的発展を目指しております。

今後は、附属農場花卉部門の施設面での改修を急ぎ、より良い教育・研究環境を学生に提供できるよう引き続き活動していきたいです。

また、私自身、まだまだ技術的・精神的にも未熟ですので、常に新しいことを取り入れて行く姿勢を持ち、学生に負けない好奇心と行動力で更なる飛躍を成し遂げたいと思っております。